

インターネットを利用した異文化理解教育

——青年海外協力隊員と高校生の交流

久保田真弓 小池浩子 徳井厚子

はじめに

これまで小学校、中学校、高等学校における異文化理解教育の授業では、留学生との交流、料理教室、歌、民族衣装の紹介など一過性の課題を取り上げることが多かった。

また、インターネットを利用して情報収集することが主で、それを介して海外に住む人と意見交換を行ない、互いの文化について考えるということはあまり実践されていない。また、たとえ、インターネットを介した海外との交流であっても、コンピュータやインターネットの設備が整っている先進国の人たちとであったり、第二言語である英語を使用した授業の実践であったりすることが多い（教育開発研究所、一九九四、川崎、一九九七など）。

例えば、水村（二〇〇〇）は、「現代社会」という科目で、日本の商業高等学校の生徒とオーストラリアの中高一

貫校の生徒との間でインターネットを利用し意見交換させている。課題に沿った議論だけでなく、人権、オーストラリアの白豪主義について討論するなかで、「modern」という言葉の問題についても議論が発展したことを述べている。しかし、すべて英語で実践したため、日本人にとっては英語という第二言語への苦手意識から交流への意欲そのものが失われる懸念が報告されている。

また、河野（一九九九）は、日本、アメリカ、ベルギーの高校生が、三カ国の環境保全に関して共同で研究したことを報告している。この研究は、各高等学校が単独で進め、その結果を英語で電子メールを介して発表する形であったが、それと同時に進んだ三校による学校文化の比較では、

キーワード▽高校生、青年海外協力隊、インターネット、異文化理解教育、「総合的な学習の時間」

メールが頻繁に交換され、生徒が海外校の存在を十分に感じ、連帯感をもつ契機になったという。

さらに、リアウトジョンソン (Liw and Johnson, 2001) は、台湾で英語の教師を目指す大学一年生とアメリカの大学で英語の教員免許の取得を目指す大学生が、電子メールで自由に交わしたメッセージの分析から、どのような文化の側面が表出するかを報告している。三学期間行なわれた交流の結果、最も頻繁に出された話題は、順番に、地理的な情報、祝日、教育制度、名前の由来、歴史、言語、宗教、友人関係、最近の出来事であった。このように議論する課題を与えなくても話題が広がり、互いの文化に興味を示す点が、海外との電子メールによる交流の利点として指摘されている。

これらの事例から、インターネットを利用しての交流では、使用する言語に配慮すること、学校文化の比較など身近な問題で自由にインタラクションが起きる状況を作ることが交流の成果を高めるのに良いことが窺える。

そこで、小論では「総合的な学習の時間」での取り組みの可能性をも念頭に、異文化理解教育のひとつの方向性として開発途上国に在住する青年海外協力隊員（以下、隊員）と高校生とのインターネットを介した日本語による交流から、どのような文化理解が促進されたかを検討し、授

業実践の意義を考察する。

新学習指導要領によれば、「総合的な学習の時間」が、平成一四年度から小学校と中学校で、平成一五年度から高等学校で実施されることになった。そこでは、国際理解、情報、環境、福祉、健康など従来の枠を越えた課題に積極的に取り組み、主体的に学ぶ資質や能力を育てること、自己の生き方を考えることができるようにすることなどが求められている。海外にいる隊員との日本語による電子メールを使ったやり取りは、これらの要求に応えられる学習と考える。

一 青年海外協力隊員との電子メールによる交流

小論では、インターネットを利用した高校生との交流の対象として、日本政府が開発途上国に派遣する青年海外協力隊員を取り上げる。その理由としては、次の四つがある。一番目に隊員との交流では、言語と交流の手段に支障がないことが挙げられる。隊員とは、母国語で交流できるだけでなく、隊員の九割がパソコンを個別に途上国に携帯し、活動中も情報発信できる状態になったことが背景にある（亀井・久保田、二〇〇一）。

二番目に、隊員は、途上国に二年間滞在するので、異国での生活を通して得た実体験を伝えられる立場にある。ほ

とんどの隊員は、滞在二年目でカルチャーショックを克服していること（久米、二〇〇一）、多くの隊員が困難に直面しながらも、身体的、心理的、対人関係、仕事面などで葛藤が個人の内部で互いに関連し合いながら、適応に向けて心身の状態を作り上げていること（丸山・上原、二〇〇二）の報告がある。そこで、派遣されている隊員は、途上国の体験などを伝えられる貴重な人材であると判断した。

三番目に、隊員との交流では、異年齢の集団から学ぶ状況を作ることになる。新学習指導要領では、「グループ学習や異年齢集団による学習」など多様な学習形態などを紹介しており、隊員と高校生は年齢の異なる集団に属し、それに応える形となる。

四番目に、開発教育の視点を取り入れる必要性を考慮した。小学校、中学校、高等学校の教員四、五〇〇人を対象に平成一〇年に行なわれた調査によると、「開発教育」という言葉自体の認知度は、約一割（一、九一〇人のうち一九六人）で、人権教育、環境教育、平和教育、国際理解教育、異文化理解教育と比べかなり低い（国際協力事業団、一九九九）。しかし、実際に開発途上国をめぐる問題について取り組んでいる教員は全体の四割おり、今は取り組んでいないがその必要性を感じている教員は、九割にのぼると報告されている。そこで、身近な授業の実践例を紹介す

る意義があると判断した。

さらに、小論では、文化を政治、経済や民族舞踊など伝統文化のレベル（Culture「大文字文化」）と行動様式や考え方といった人間の生活レベルにおける文化（culture「小文字文化」）に大別する（Brislin, 1985）。異文化理解においては、両方の文化について理解することが必要であると思われるが、今までの文化に関する授業実践の取り組み事例（中野、一九九九）では、「大文字文化」に偏っている傾向が強いように思われる。文化について理解させようとするときに、身の回りの日常生活や生活習慣の違い、人々の価値観、態度、信念の違いなど生活文化を題材にもっと身近なものを扱った取り組みがあってもよいと考える。

二 授業実践の概要

開発途上国に派遣されている隊員の協力を得て、平成一三年度（二〇〇一年度）に三つの高等学校で隊員との電子メールの交流による授業実践を行なった。三校の授業実践の概要は、表1の通りである。

三校とも通常の科目で授業は行なわれており、隊員との交流は二学期以降に位置付けられている。また、授業の運営は担当教諭に委ねており、小論では、三校の授業実践の比較ではなく、交わされたメールの内容に着目して文化的

表1 3つの高等学校における授業実践の概要

高等学校	高校A	高校B	高校C
地域	東京	大阪	大阪
公立・私立の区別	私立	私立	公立
科目名 選択の有無	「国際」 選択	「比較文化」	「異文化理解」 選択
交流期間	10月から3月まで隔週	10月から1月まで毎週	10月から1月まで毎週
学年	高校2年生	高校2年生	高校3年生
生徒数	21人（うち外国人生徒4人）	44人	38人
隊員数	3人	10人	13人
隊員の滞在国内	ベトナム、フィリピン、ブルキナ・ファソ（各1人）	中国（2人）、モンゴル、ラオス、ジョルダン、タンザニア、ジンバブエ、ブルキナ・ファソ、パプア・ニューギニア、エル・サルヴァドル（各1人）	フィリピン（2人）、中国、モンゴル、インドネシア、ラオス、エチオピア、ニジェール、ボツワナ、ブルキナ・ファソ、パラオ、ミクロネシア共和国、グアテマラ（各1人）
隊員の職種*	数学教師、体育、システムエンジニア	理数科教師、日本語教師、幼稚園教諭、体育、情報、コンピュータ、電子工学、植林、園芸作物、保健師	小学校教諭、日本語教師、視聴覚教育、音楽、家政、体育、水泳、自動車整備、植林、看護師、上下水道設計施行、システムエンジニア

（注） 隊員の職種名は、青年海外協力隊事務局発行の募集要項に準じた。

理解の側面から報告する。

隊員との交流にあたって高等学校Aでは、生徒六、七人、高等学校B、Cでは、三、四人で一班を作り、各班に隊員を一人当て（高校Bでは二人当てた班が一つある）、一班の生徒たちと一人の隊員との間で、電子メールによる交流が行なえるように設定した。高校生と隊員は、お互いに面識がないため、隊員に関しては事前に自己紹介を書いてもらい、それを一覧にして生徒が交流する相手国を選んだ。

各班の電子メールのやり取りは、インターネット上のフォルダーに保管し、保管されたメールを今回の分析対象とした。

三 データ分析と内容分析の結果

内容分析にあたっては、メールで取り上げられる話題に注目し、言及されている特定の事物、事象、人物、行為、国、あるいは思想など項目を立てて分類した。なお、小論では、話題を「会話の流れの中でみられる結束性のあるまとまり」と定義する。話題の単位は、一文以上で構成されているものとし、これを一つの項目としてまとめた。

生徒が送信したメールの総数は、高校A、B、Cそれぞれで、一三、六二、六〇回であり、隊員からのメール総数は、生徒への返信と自発的発信を含め、一四、六六、六五

回であった。一回のメールの長さは、数行から、A4判の大きさで八ページに及ぶものもあった。

表2は、内容分析の結果を示した一覧で、上位一〇位までを示している。全員で一七九項目の話題が延べ一、四八八あった。高校Aの生徒によるメッセージの内容では、「生活用品」についてが多いが、それは、ベトナムの隊員に日本では見られない日用雑貨について何回か聞いているためである。高校Bでは、隊員から日本での芸能界の流行について聞かれたため「芸能・娯楽」が多くなっている。

高校Cでは、教師の指示で自己紹介からメール交換を始めたため、必然的に「自己紹介」が多くなっている。隊員からのメールは、基本的には生徒からの質問に答える形で話が始まっている。表中の「社交」とは、双方の人間関係を円滑にするために交されたメッセージを指す。

全員のメッセージを総合的に見ると、「食べ物」、「芸能・娯楽」、「自己紹介」、「気候」、「年中行事」、「隊員の仕事」、「状況説明」、「言語」、「スポーツ」、「住宅」の順で出現する頻度が高くなっている（社交は除く）。「芸能・娯楽」が多いのは隊員から質問されたことにもよるが、生徒の方も芸能界の最新ニュースを積極的に発信しており、芸能関連の情報は、身近で双方にとって手軽に話題にしやすく、人間関係を円滑にする役目を果たしていると考えられ

る。「年中行事」は、授業実践が秋学期に当たり日本ではクリスマスやお正月を挟んだためだと思われる。他の項目については、次節以下で取り上げる。

以上、上位一〇位の話題で全話題の四三・五%を占めており、残り五六・五%は、一六九項目の話題に分散していることになる。

四 主な話題

「食べ物」

表2より「食べ物」に関しての話題が二位で多いことが分かる。生徒は、人気のある食べ物、主食などについて聞くほか、クリスマス料理（グアテマラ）や、マンゴ（フィリピン）やホピロン（ベトナム）の食べ方など郷土料理について具体的に尋ねている。また、隊員からは珍しい食べ物の報告がくる。「一度、ボツワナ人の家に遊びに行ったとき、これ食べる?」といって差し出されたのが、『牛の鼻』。鼻を乾燥させたものを薄切りにしてそのまま食べるとのこと。鼻の穴とか思いっきり原型をとどめている代物で、ぎゃあーっと叫びそうでしたが、なんとか一口、ぱくり。うーん、なんとというか、くさい油の固まりを食べているようで、私はダメでした。」（ボツワナ）。単に食べ物の違いを珍しがるだけでなく、生徒がえびの話をするると、

隊員はインドネシアのえびの養殖の現状を伝えるなど話題が展開する場合もある。

さらに、食べ残しの問題を問う生徒もいる。例えば、学校での英語の合宿を経験した生徒が、そこで見た食べ残しに疑問をもち「本当に日本人は贅沢だと思います。パプア・ニューギニアの人は、食べ物を大切にしますか?」と問うている。それに対し隊員は、「村で生活している分には、少なくとも食べ物に関しては心配要らないのです。ほぼ自給自足できます。この人たちに、上記の質問は愚問です。食べ物以前に自然の恵みに感謝してまずので」。このように食べ物に関する身近な話題は、日本の消費社会の在り方を改めて考えさせる話題をも引き出している。

「気候」

気候については、生徒にとっても隊員にとっても身近なため挨拶を兼ねて話題にしやすい。例えば、事前に地図でグアテマラの位置を確かめ、赤道沿いなのでかなり暖かいのではないかと考え、隊員に聞く。すると隊員は、肌寒いという。それは高地だからであり、隊員とのやり取りのなかで、調べ学習では読み取れなかった気温の違いに気づかされることがある。

また、長期に滞在すると、隊員が体感する温度の表現が

青年海外協力隊隊員				全 員
高校A	高校B	高校C	3高校合計	
内容(回数、%)	内容(回数、%)	内容(回数、%)	内容(回数、%)	内容(回数、%)
1. 食べ物 (10, 15.2%)	1. 食べ物 (25, 6.5%)	1. 社交 (39, 9.0%)	1. 社交 (67, 7.6%)	1. 社交 (142, 9.5%)
2. 住宅 (6, 9.1%)	1. 社交 (25, 6.5%)	2. 自己紹介 (27, 6.2%)	2. 食べ物 (60, 6.8%)	2. 食べ物 (94, 6.3%)
3. 宗教 (4, 6.1%)	3. 隊員の仕事 (20, 5.2%)	3. 食べ物 (25, 5.8%)	3. 芸能・娯楽 (38, 4.3%)	3. 芸能・娯楽 (60, 4.0%)
3. 年中行事 (4, 6.1%)	3. 気候 (20, 5.2%)	4. 芸能・娯楽 (22, 5.1%)	4. 隊員の仕事 (36, 4.1%)	4. 自己紹介 (59, 4.0%)
5. 写真 (3, 4.5%)	5. 芸能・娯楽 (16, 4.1%)	5. 隊員の仕事 (16, 3.7%)	5. 気候 (34, 3.8%)	5. 気候 (57, 3.8%)
5. 社交 (3, 4.5%)	6. 年中行事 (15, 3.9%)	6. 学校 (16, 3.7%)	6. 年中行事 (30, 3.4%)	6. 年中行事 (53, 3.6%)
5. 状況説明 (3, 4.5%)	7. 教育 (13, 3.4%)	7. メールについて (15, 3.5%)	7. 言語 (28, 3.2%)	7. 隊員の仕事 (47, 3.2%)
5. 生活習慣 (3, 4.5%)	7. ローカル事情 (13, 3.4%)	7. 言語 (15, 3.5%)	7. 自己紹介 (28, 3.2%)	8. 状況説明 (37, 2.5%)
9. 任地事情 (2, 3.0%)	9. 文化の違い (12, 3.1%)	9. 状況説明 (13, 3.0%)	9. 状況説明 (25, 2.8%)	9. 言語 (35, 2.4%)
9. 気候 (2, 3.0%)	9. 言語 (12, 3.1%)	10. 気候 (12, 2.8%)	10. スポーツ (20, 2.3%)	10. スポーツ (31, 2.1%)
9. 治安 (2, 3.0%)			10. 学校 (20, 2.3%)	10. 住宅 (31, 2.1%)
計 (66, 100%)	計 (386, 100%)	計 (434, 100%)	計 (886, 100%)	計 (1,488, 100%)

変わってくる。「最近朝方寒くて毛布をかけて寝ています。実際の気温は二〇度前後だと思えますが、ここにいると二〇度でも寒く感じます」(ブルキナ・ファソ)。このように、気候や風土における現地の実感を生徒に伝えている。

「言語」

言語については、公用語を問うたり、調べた事柄を確認したりする例がある。隊員の英語での苦労話から、現地人は「英語以外にも各部族語を使えるので、合計すると三、

表2 話題の出現頻度

高 校 生			
高校A	高校B	高校C	3高校合計
内容(回数、%)	内容(回数、%)	内容(回数、%)	内容(回数、%)
1.生活用品 (9, 9.9%)	1. 社交 (48, 13.2%)	1. 自己紹介 (31, 21.1%)	1. 社交 (75, 12.5%)
2. 食べ物 (6, 6.6%)	2. 芸能・娯楽 (22, 6.0%)	2. 社交 (23, 15.6%)	2. 食べ物 (34, 5.6%)
2. 服装 (6, 6.6%)	3. 食べ物 (21, 5.8%)	3. 時事 (7, 4.8%)	3. 自己紹介 (31, 5.1%)
4. 気候 (5, 5.5%)	4. 自己のこと (16, 4.4%)	3. 食べ物 (7, 4.8%)	4. 気候 (23, 3.8%)
4. 生活 (5, 5.5%)	5. 年中行事 (15, 4.1%)	5. 気候 (5, 3.4%)	4. 年中行事 (23, 3.8%)
4. 年中行事 (5, 5.5%)	6. 学校行事 (14, 3.8%)	5. 地理 (5, 3.4%)	6. 芸能・娯楽 (22, 3.7%)
7. 社交 (4, 4.4%)	7. 気候 (13, 3.6%)	7. 年中行事 (3, 2.0%)	7. 自分のこと (16, 2.7%)
7. 状況説明 (4, 4.4%)	8. スポーツ (11, 3.0%)	8. 状況説明 (4, 2.7%)	8. 時事 (15, 2.5%)
7. 生活習慣 (4, 4.4%)	8. 休み (11, 3.0%)	8. 写真要望 (4, 2.7%)	9. 学校行事 (14, 2.3%)
10. 時事 (3, 3.3%)	8. 協力隊 (11, 3.0%)	10. 隊員の仕事 (3, 2.0%)	10. 住宅 (13, 2.2%)
10. 名前 (3, 3.3%)	8. 文化の違い (11, 3.0%)	10. 水 (3, 2.0%)	
10. 住宅 (3, 3.3%)		10. 戦争 (3, 2.0%)	
		10. 自己紹介再送 (3, 2.0%)	
計 (91, 100%)	計 (364, 100%)	計 (147, 100%)	計 (602, 100%)

(注) 各グループ第10位まで示した。

四つの言葉を使って会話できるンよ。全く素晴らしい」(バプア・ニューギニア)と、現地の人々の会話力を称えているものがある。また、生徒がいきなり「Nee yibeogo」(ニーベオゴと発音し、「こんにちは」という意味)という言葉から始め、隊員に「それってどこで調べたのですか？モレ語じゃないですか、かなり驚きました」(プルキナ・ファン)と言わしめた。

生徒は、隊員から現地語を教わり、メールの始めと終わりの挨拶に使ったり、第二言語で悪戦苦闘している隊員から第二言語習得の秘訣を聞いたりしている。

五 話題の特徴

展開する話題

隊員が日本とは違う文化で生活していることから、日本では、あまり気づかないことに話題が展開していくことがある。例えば、女子高校生が自己紹介で髪が長かったことを述べると、隊員は、髪という話題から、ミクロネシア人女性の髪の毛の話題を持ち出し、同じ長い髪でもパーマをかけたように縮れているので、まるめて塗り箸で留めていることを伝えている。さらに、現地で話題になるしらみについて言及している。このように、髪の毛の話題から、日本の塗り箸の使い方やしらみの話など、日本では想像がつかないような話の展開になる例がある。

かないような話の展開になる例がある。

日本では得られにくい情報

中国、太平洋諸島、フィリピンなど旧日本軍や日本人と関係が深い所では、それが建物や人々が使う言葉、歴史上の重要な日などとして現地の人に語り継がれている。日本の歴史教科書では、あまり詳細に触れないことも、隊員の生活を通してその国の立場に立つて見ることがができる。日本の歴史を現地の人に習うことは、「たいへん恥ずかしいことだ」と隊員自身がショックを受け報告している。

また「侵略ではなかったので、お年寄りには、いろいろなことを伝えてくれた日本を尊敬しています。(略)パラオ語のなかにはたくさんさんの日本語がつかわれているんだよ。

例えば、『ダイジョーブ』『アブナイ』『センセイ』『カルーイ』『モンダイナイ』などなどパラオ語の会話の中に急にこのような言葉が飛び出すから、ほんと、面白いです。』と現在の様子を伝えてくる隊員がいる。派遣された国によって異なる視点で垣間見られる歴史の一側面である。

開発問題に関する話題

高校Bでは、一学期に「ストリートチルドレン (street children) 住む家がなく、路上で物乞いや物売りをして暮ら

す子どもたち」と児童労働」など開発問題に関して調べ学習をしている。そのため隊員とのメールでの交流でもそれが話題になるときがある。

例えば、フィリピンの隊員とは、日本の援助について議論をしている。また、フィリピンの他の隊員からは、スモーカーマウンテンに行ったときの感想が自発的に送信されてきたり、スカベンジャー (scavenger ゴミ拾いの人) に関する多量の資料が郵便で送られてきたりしている。エチオピアの就学率など統計に関しては、隊員が知っている数値より生徒が調べた数値の方が現状に合っていることをやりとりで見ている。

また、事前学習では話題にならなくても、隊員の仕事を聞くなかで、途上国の現状が垣間見られるときがある。例えば、ラオスの病院の事情を説明する看護師隊員からの、「お金が底をついてしまったら患者さんのほうから退院したいといっています」という一文に生徒はショックを受け、発表会の授業で取り上げていた。

貧困問題などについて調べると、どの途上国も貧しくて同じような状況であると捉えがちだが、メールの交流を通して、ストリートチルドレンのいない国、都市と村の違いなど詳細が分かり、社会の多様性が浮かび上がってくる。

隊員の人生観

隊員の年齢は、二〇代後半から三〇代である。高校生とは一世代も違わないが、意を決して協力隊に参加したこと、学生ではなく仕事をしているということが、高校生にとっては人生の大先輩に映る。

また、隊員も派遣国が決まるまでは、高校生と同様に開発途上国に対し漠然としたイメージしか持っていないことが多い。しかし赴任後、現地の人々と共に働くことにより、少しでも現地の様子を知ってもらいたいという姿勢に変わる。そして、交流が始まると生徒の進路のこと、勉強の方法、将来のこと、仕事の決め方などについて助言したり、時には隊員自身が自分の高校時代を振り返り、高校生では気付きにくい人生の大切なことを教えている。

時期にあった話題と表現の工夫

メールは瞬時に送受信できるところに特徴がある。そこで時期にあった話題が飛び出すことがある。今回の授業実践では、二〇〇一年九月に発生したアメリカの貿易センターを破壊したテロ事件について、また、獅子座流星群について報告し、隊員のいる国でも見られたか確認するものがあった。

また、ホームページや交換した写真から気付く話題、メ

ールのやり取りについての取り決めやコンピュータの故障など状況を伝える話題などがある。

さらに、メッセージには絵文字や感情表現の記号が付随していたり、会話調でつづられたりしている。隊員と生徒の関係は、先生と生徒との関係と違い、教える教わる関係が柔軟で対等になっていることが分かる。

六 考 察

隊員との交流による異文化理解

開発途上国にいる隊員と高校生とのインターネットによる交流では、世代、地域、置かれている環境の違いにより、「食べ物」、「芸能・娯楽」、「気候」、「年中行事」など多様な方向に展開していることが分かった。また、貧困や開発問題に関しても調べるだけの学習と違い、実際の人間が介在することになるため、生徒の理解が国から地域、都市、村と具体的になるだけでなく、実感が伴うようになっていく。これは、授業の前後に実施したアンケート調査によっても示されており、生徒の開発途上国に対するイメージの変化が顕著に表われている。例えば、授業前に調査した途上国に対するイメージとして最も多かったのは「貧しい」であり、その他「地域紛争」「農業」「裸族」など大きく

くりであったのが、授業後では、「努力している」「がんばっている」など人々の具体的な生き方を通じた見方に変わっている。

これらのことから、授業実践の結果、人口、面積、気候、学校教育など「大文字文化」についての生徒の認識が、隊員の視点を通すことで、「小文字文化」の理解へとつながっているといえよう。

一般に、「小文字文化」で表わされる人々の価値観、信念、態度の違いは、自分とは異なる文化に属する人と接触して初めて気付くところがある（池田・クレマー、二〇〇〇）。とくに今回の授業実践では、留学生の話聞くなどの一過性の交流ではなく、数カ月わたる同一人物との交流としたため、生徒は、隊員の異文化体験を共有することができた。つまり生徒は、日本にいながらにして「大文字文化」から「小文字文化」への理解が促されたといえよう。

さらに、交流する相手国の人とはなく隊員と交流する意義は、母国語でやり取りできるだけでなく、事物の説明や解説に役立っているところにもある。例えば、ポツワナの食べ物が地域によって違うことを説明するために、関東と関西の例を出すことで、それが特別なことではないことが生徒に伝わる。ミクロネシアでは犬を食べるといふ説明

でも、隊員は犬をペットとしてしかみない日本の事情を知っているため、犬を食べるという背景には、海に囲まれた島国で、たんばく質を魚以外でとることがいかに難しいかという解説を加えることができる。日本という文化を知っている隊員だからこそ、日本の事例と比較したり誤解のないように解説を加えたりできるのである。これが生徒の異文化理解を促進する重要な要因になっているのではないだろうか。

隊員を介すことで相手国文化の理解に実感に伴うと、それに応じて行動するようにもなる (Bennett, 1979)。生徒たちは、交流の過程でインターネットを駆使して積極的に地図を調べたり、特産品の統計を見たり、現物を探しにスーパーマーケットに行ったりしている。

「総合的な学習の時間」との関わり

隊員の異文化体験を共有する過程では、隊員の人生観が生徒に伝わる。隊員になるには、途上国で教える技術の試験を受け、二カ月あまりの語学訓練を経なければならぬ。その後の二年間の途上国での仕事や生活は、隊員にとって未知の体験であるが、それを日本にいる生徒にも伝えたという思いから、今回の授業実践に有志で参加している。そのため、異文化での葛藤、疑問、喜びなどが素直に表現

され、それを自分なりに解釈し、生徒に分かりやすく伝えようという真摯な態度がみられる。生徒からの質問は、隊員にとって自分の体験を客観視したり、高校時代を振り返る契機になっている。また、赴任して間もない隊員にとっては、自分の仕事について分かりやすく説明することの難しさに気付かせるといふ意義をもっていた。

このように先生と生徒という関係とは違い、隊員と生徒という対等にやりとりし学び合う関係から、生徒は主体的に学ぶ意義や、自らの生き方を考える機会を得ているといえる。とくに、個人的な手紙よりも公共性が強く瞬時に届く電子メールを介すことで豊かな表現方法が織り込まれ、その対等性や親密性が促進されている。そのため高校生にとっては、総合的な学習のねらいにみられる「自己の生き方を考える」ためのきっかけともなる。

しかし、「総合的な学習の時間」は、高等学校より小学校、中学校で取り組まれる場合が多い(山崎、二〇〇〇)。受験との関連があるとは思われるが、青年期の高校生にも意義はあると思われる。他の科目と連携することにより多様な話題が深められる可能性があったり、コミュニケーション能力や情報リテラシーの育成の面でも寄与できると考える。

授業実践の限界

小論のような授業を実施するには、主に次の三つの点を考慮しなければならない。

まず、三校とも班ごとに隊員を割り当て電子メールで交流したが、隊員のなかには交流途中でコンピュータが壊れたり、病気になるたり、任国外旅行に出たりしてメールのやり取りが一時途絶える場合がある。そうすると班により交流の進度にばらつきが出、発表会の準備が十分にできず生徒の学習意欲を損ねかねない。教諭にとって一番悩む点である。

次に、隊員との交流は、授業の一環で行なっているのでメールはすべて教諭の目を通してから発信したり、教諭も含めたメールリストで管理したりしている。学校のメールリングに関する支援体制によっては、教諭にとってメールの管理が負担になることもあろう。

さらに、隊員との交流の実現には、隊員の協力が不可欠である。年間の派遣人数と本来の隊員の任務を考えると、この授業実践を普及するには限界がある。

以上のような特殊性から隊員との交流は、隊員を単なる情報源とする一斉授業には向かない。むしろ、つねに人を意識して交流し、種々起きる問題に柔軟に対処してこそ両者に新たな学びが生まれ、交流の意義が見出される。その

意味で、従来の学校文化での枠組みとは違う視点で実践の意義を捉え、評価する必要があるだろう。

異文化理解教育のひとつの方向性として、この授業実践より、「小文字文化」を理解することの重要性が指摘できるだろう。それには、対等な関係にある人との交流、交流期間、意義のあるかわり、現実社会とのつながりが必要である。それらが整うと、自己とは異なる他者から双方共に学ぶ機会を構築することができるのではないだろうか。

〈引用文献〉

池田理知子・クレマー、E・M、二〇〇〇、『異文化コミュニケーション入門』、(有斐閣アルマ)、有斐閣。

亀井美穂子・久保田賢一、二〇〇一、『国際ボランティアの情報活用に関する実証的研究——インターネット利用から見る青年海外協力隊との連携』、『異文化間教育学会第二二回大会発表抄録』、二四―二五ページ。

川崎誠司、一九九七、『インターネットを活用した授業をつくる』、佐藤郡衛編『国際理解教育の考え方・進め方』三号、教職研修八月増刊号、教育開発研究所、一〇八―一一二ページ。

久米昭元、二〇〇一、『青年海外協力隊にみる適応と国際的資質』、『異文化との共生をめざす教育——帰国子女教育

研究プロジェクト最終報告書」、東京学芸大学海外子女教育センター、一八七―二〇一ページ。

河野憲次、一九九九、「インターネットによる日米ベルギー高等学校国際共同研究——総合的教科横断型学習による国際理解教育」、『国際理解』三〇号、帝塚山学院大学国際理解研究所、一四六―一五九ページ。

国際協力事業団、一九九九、「開発教育のあり方」国民参加型協力推進基礎調査研究報告書。

教育開発研究所、一九九四、「異文化理解教育読本」一一八号、教育開発研究所。

中野重人、一九九九、「総合的な学習の時間」をどう設計するか、中野重人・廣島憲一郎編著『自ら学ぶ「総合的な学習の時間」の作り方——誰にでもできる実践ガイド』、東洋館。

丸山英樹・上原麻子、二〇〇二、「青年海外協力隊員の異文化適応——シリアおよびザンビア滞在を事例として」、『国際協力研究誌』、広島大学大学院国際協力研究科、一〇三―一一七ページ。

水村裕、二〇〇〇、「インターネットで語り合う平和と人権——世界水準のディスコースをめざして」、『国際理解』

三一号、帝塚山学院大学国際理解研究所、八五―九四ページ。

山崎保寿、二〇〇〇、『総合的な学習の教育経営ビジョン——総合的な学習の背景を知り構想力を高める』、信濃教育会出版部、三三―三五ページ。

Bennett, M. J., 1979, "Overcoming the Golden Rule: Sympathy and Empathy." In Nimmo, D. (ed.), *Communication Yearbook*, 3. New Brunswick, NJ: Transaction Books, pp. 407-422.

Brislin, R. W., 1985 (July 8-17), Intercultural Workshop "Culture General Assimilator: development and use for cross-cultural training" East-West Center, Honolulu, Hawaii.

Llao, M. and Johnson, R. J., 2001, "E-mail writing as a cross-cultural learning experience." *System*, 29, Oxford: Pergamon Press, pp. 235-251.

本研究は、平成一三年度関西大学学術研究の助成金の一部を受けて行なわれた。

(くぼたまゆみ 関西大学総合情報学部助教授、
コミュニケーション論・異文化理解教育)
(こいけひろこ 信州大学教育学部助教授、
異文化間コミュニケーション・異文化間教育)
(とくいあつこ 信州大学教育学部助教授、
国際理解教育)